

---

**悪ノ崩壊      こんな展開は嫌だ！**

奏手由恵

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

悪ノ崩壊　　こんな展開は嫌だ！

### 【Nコード】

N9136P

### 【作者名】

奏手由恵

### 【あらすじ】

悪ノP様作、悪ノ召使・娘、などをパロディー風に書いてみました。  
形の上では短編連作です。ネタが思いつかない限りかけないので超・不定期更新です。  
シリアス成分が、パロディーときどき腹黒、一部キャラ崩壊…といったことになっています。原作の雰囲気壊したくない方はぜひバツクを。

## あのと君は笑顔でいった（前書き）

こんにちは。読んでこれは違うと思ったかた、すぐバックしてください。

シリアスはどこかに行きました。

この章の元ネタ様 動画サイトにて、鏡音三大悲劇映画ダイジェスト風にしてみた ならびに三大悲劇ダイジェストNG集

二次創作の二次創作ということになるかと思えます。これはだめだと思われた方、感想欄等で作者までご連絡ください。削除します。

\*私が別で書いている悪ノ役者（悪ノシリーズの二次作品です）に以前載せていたのをもってきました。

## あるとき君は笑顔でいった

外からは、王女に反発し、制裁を加えようとする革命軍の音が聞こえてきました。王女は玉座の間で、たった一人震えていました。

「…ほら、僕の服を貸してあげる。」

王宮は囲まれ、家臣たちも逃げたあとの玉座の間。たった一人残った召し使いは、双子の姉でもある王女に向かっていいました。

「え…？」

状況が飲み込めていない王女は固まっています。

「これを着て早く逃げて」

召し使いはそう言って、自分の着ている服と同じものを差し出しました。

召し使いは服を渡すと、くるりと背をむけます。

「逃げるにはその服装が動きやすいので一番です。髪飾りも外して、僕みたいの一つに束ねてくださいね。」

王女は豪華なカーテンに入ると、着替え始めました。

男女の差があるとはいえ、服はぴったりでした。王女は着ていたドレスとつけていた髪飾りを持って、召し使いの前に現れました。

王女なんていません。召し使いが二人いるだけです。召し使いはにっこりすると、もうひとりの召し使い、もとい王女から服をひよいと取り上げました。

「こんなところに服をおいてあると不自然ですからね。戻してきます。ついでに脱出経路も見てきます。」

召し使いはそういつて部屋を出て行きました。

しばらくたつても召し使いは戻ってきません。もしかして捨てられたのでは。そう王女が思ったときでした。

部屋に一人の少女が入ってきました。王女と同じ髪と瞳。

「…服を着るのに手間取ってしまいました。…似合いますか？」

似合うもなにも、王女本人からみても、彼は王女にしか見えませんでした。

「…あなたは、逃げないの？」

少女の間に少年が答えます。

「逃げるのは召し使いで、捕まるのは王女です。」

さらりという少年に、少女は肩を震わせます。

「そんなこと、できっこない…！」

少年は笑います。

「大丈夫、僕らは双子だよ。きっと誰にもわからない。」

少年は、兄が妹を慰めるように言いました。

ふと、二人は耳を済ませます。廊下を走って来る音が聞こえてきます。少年は早口で言いました。

「大臣たちが使った道はもう無理なので、ひとまずそのカーテンに入ってください。なかに扉があるのでしょう？…外に出られます。僕はすぐ扉の鍵をかけるので、後ろから追われる心配はありません。」

王女は泣きながら首を横に振りました。

「一人だから逃げられるんです。…王女と顔のよく似た召し使いは一人しかいませんから。」

召し使いは王女をカーテンの奥へと押し込みます。

部屋の扉をたたく音が大きくなりました。破壊音からして、すぐに突破されてしまいそうでした。隠し扉の前でこそそしている二人ともおしまいです。

召し使いは踵を返しました。

「…ねえ、あれを使つて。」

ささやく王女が指差す先。玉座の背もたれの裏側には、ひとふりの剣がありました。

王女に扮した召し使いが剣をとると、赤い鎧の女剣士を筆頭に革命軍が入ってくるのが同時でした。

あのと君は笑顔でいった(後書き)

この次からが違ってきます

あのととき君は人がかわった(前書き)

キャラ崩壊の危険性あります

あのととき君は人がかわった

「王女、覚悟！」

少年は剣をじっと見つめていました。王族の護身用にはもったいないくらいの名刀です。軽く振ると、風を切る音がするどく響きました。

剣士はしかしひるみません。

「私たちに勝てるんです？」

召し使いは革命軍の面々を見ました。兵役についたような人はほとんどいません。その兵役も武器がちょっとだけ扱えるようなお粗末な訓練です。あの女剣士は別格として、あとはその他大勢です。烏合の衆です。

本当は大人しく投降するはずでした。が。

…気が変わった。

王女：の姿をした召し使いはにっこりと歯を見せて笑いました。

「おまえら、表へ出る。」

その場は固まりました。

カーテンに隠れていた王女も例外ではありません。

あの召し使いは、あんなにおいしい仕種をしながら、なんだこれは。確かに剣を使えといったけど、あんな風にたきつけるためじゃない。問答無用で殺しにきた場合のための保険としてだった。それを。おまえら、表へ出るだと？怒り狂った民衆相手に敵わず、二人とも終わりで。

…いや、あの男言葉全開で、正体がばれたかも。

王女ははらはらしながら見守りました。

幸い、革命軍は、王女の気が狂ったと思ったようです。対して警戒するでもなく、じりじりと近寄ってきました。

対する偽王女。彼は笑っていましたが、先頭集団がある程度のと



ころまでくると、顔色を変えました。

一步、二歩三歩。スロー、クイッククイックで踏み出し、彼は横に一閃しました。

血が吹き出します。三人一辺に倒れます。

返り血を浴びた王女は、冷たい瞳で革命軍を見つめました。

「だからいつたる？表へ出るつて。」

そこからが大変でした。革命軍はばったばったと倒れて行きます。屈強なものは腹部を刺されてもまた向かってくるので、王女は面倒くさくなつて腕か足を狙うことにしました。

そうこうするうちに、半分以上が戦闘不能になりました。ちなみに死んではいません。立てなくなつたり武器が持てなくなつたり。血はわりと飛び散つてますが、身体はみんなひつついてます念のため。

女剣士は舌打ちしました。蜂起したのは農民、商人階級です。このままでは労働者たちが負傷者に早変わり。冬が越せないかもしれせん。女剣士は革命軍を制すと、前へめました。

「あたしが相手をしてあげる。覚悟しなさい！」

王女はちらりとみて、無視。

「やだ。まだ遊びたい。」

王女の剣が男たちを襲います。

「…こっちが勝つたら言うこと聞いてくれる？」

王女は意地悪く笑いました。女剣士は唇をかみます。でも背に腹は変えられません。条件を言うよう促しました。

「もしそっちが勝つたら、私は大人しく処刑される。こっちが勝つたら、処刑はなし。一生生活していただくだけのお金をもらつて郊外に住むように計らってもらい、今後王位に口出しはしない。…どう？」

女剣士は、きつとにらみながら応じました。

革命軍と本物の王女が見守るなか、試合が始まりました。命懸けです、休む間もなく剣の打ち合いが続きます。最初は均衡していましたが、次第に女剣士がおされはじめました。

彼女の剣が弾かれます。

王女の剣が、剣士の喉元へと突き付けられます。

剣士の負けでした。

あのと君は人がかわった(後書き)

あのキャラとあのキャラがもう黒い…。

## あのととき君は

そのときです。

「動くな！」

長い弓を王女に突き付けている青い男が現れました。

青の王子でした。

「偽物め！おまえはただの召し使いだろう！」

言い当てられたほうはふっと笑い、反対に王女本人はびくりとしました。

カーテンが揺れます。

王子はめざとく反応し、そちらに狙いを変えました。

王女の影武者の顔がわずかに強張ります。

「二人とも、大人しくきてもらおうか？」

じりじりと、革命軍が包囲網を狭めた時でした。

「みなさん」

少し低い偽王女の声。

「政治の世界をご存知ですか？」

言うがはやいか、彼は剣を片手に飛び出しました。向かうのは王子。彼は反射的に、狙いを変えたあと矢を引き絞り放ちます。

偽王女はかわすと、王子に向かって刃先を当てました。

「あ、大丈夫ですか？」

とぼつちりをくらい、肩から血を流していた女剣士を気遣う余裕までありません。

「ここで青の王子が死んだら、いったいどうなるんでしょうね」

言ったほうは、ついと首の皮一枚を切ります。

「別にどうともならないわ。」

女剣士は冷や汗を垂らしながら、その場を代表して言いました。

その返答に、場の支配者は不満そうです。

「僕は思います。ここで青の王子が死んだら、革命のどさくさで

王子が暗殺されたと言い掛かりをつけられ、国は侵攻されるでしょう。革命に参加されたみなさん、また戦わなければいけませんね。」  
一同は黙りました。重苦しい沈黙のあと、吐き捨てるように王子が言います。

「君は悪としか言いようがないな。まさか私を人質に取るとは。」  
召し使いは唇を歪ませます。

「あなたに言われたくないですよ。緑のあのこが生きていれば、緑の国が滅ぼうがなんにも思わなかったでしょう。」

王子は言葉につまりました。召使は革命軍にむけて声を張り上げました。

「あ、変なこと考えないでくださいね。僕を殺しても、そのまえに王子が死にます。王女を狙っても同じです。」

彼は女剣士を探します。探すところこり。  
「僕と王女を見逃してくれませんか？」

確信犯の微笑みです。

「…っ、この、悪め！」

女剣士は、屈服しました。

数年後。革命政府と緑の国は国交正常化。一方青の国とは微妙な関係が続いていました。わりといつ攻められてもおかしくありません。

徴兵制度は続いています。今日は月に一度の実戦演習日。

兵士らは、ばたばたと倒れていきます。ついに最後の一人が倒れました。

立っているのは金髪の少年。

それを王宮の一室から見ているのは赤い髪の女性です。

彼は、暗殺者の間でブラックリスト。あまりにも返り討ちにあうので彼の暗殺は請け負わないとギルドが決めました。

その腕のよさをかわれ、月に一度剣の教師として兵士にけいこをつけています。そのおかげで、軍事力は格段に上がり、どの国も簡単には攻めてこれなくなりました。

今青の国となんとか渡り合っているのも、ひとえに軍事力ゆえ。彼女はため息をつきます。

もし彼が王子だったら。どちらにしてもこの国は闇の部分を裏に持つ悪だったでしょう。たとえ、表面は平和でも。

彼女はこの仕事に携わるようになって思います。

いったい悪とはなんなのでしょう。

「あーっはっはっは。さあ、ひざまずくがいい！」

その高笑いを聞きながら、彼女は執務に戻ります。問いを頭の片隅に置いて。

かつて王女と呼ばれた少女は、ちいさいときに、王家に伝わるあの剣の話の聞きました。

つくりは国内一。その剣は、誰かを守るために使う。

ただ、伝承によると、副作用がある。

剣を持っている間は、

人格が豹変すること。

……訓練、終わり！全員医務室へ！

剣をしまっ元召し使い。

目の当たりにする惨状。

いつものように、彼はその場を駆け足で離れました。

あのと君は（後書き）

読んでいただきありがとうございます！

腹の中が黒くなってしまいました。パロディーとはほど遠かった気が。

イメージ壊してしまったかも…。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9136p/>

---

悪ノ崩壊　こんな展開は嫌だ！

2011年1月9日14時10分発行